

今年度と今後の取り組みについて

資料3

取り組み	課 題	計 画	成 果	今 後
文化芸術との繋がり と情報共有	・伊賀市文化振興条例、伊賀市文化振興ビジョンが十分に浸透していない。 ・事業カードの取り組みや意見交換会が、しっかり定着していない。 ・各主体がそれぞれ取り組む事業の内容や開催日時などの情報発信が、十分に共有できていない。	・事業カードを基にヒアリングを実施し、単体事業のほかに、各分野との協力、連携、協働による文化的事業の可能性について検証する。	・若者雇用促進支援事業所へのヒアリングを実施することができ、新しい分野との協力、連携、協働による文化的事業の可能性を聞き取ることができた。	・市民、地域、文化団体等へ、文化振興プランについて説明を行うことで、文化活動の理解を得て、事業カードの提出に繋げる。 ・ヒアリングを実施し、事業連携や見直し等を図る。 ・イベント情報等の文化情報の共有を図る。 ・条例、ビジョンを周知するため、告知媒体への記載についての取り組みを定着化させるとともに、ロゴマークを作成し視認性を高める。 ・意見交換会を継続して開催し、開催を定着化させるとともに、目的に沿った議論をしてもらえるようにする。
		・意見交換会を定例化し、それぞれの取り組みに理解が深まる議論や、自分たちの活動がよりよくなるためにという視点を重視して、議論してもらえるようにする。	・これまでの意見交換会から実現に繋がった事業の事例発表を行った。また、意見交換会は、各分野の関係者が課題を共有し、解決や効果のヒントを得る場であることを再確認してから開始した。このことで、他分野との協働や連携、文化事業による課題解決やまちづくりについて意見交換ができた。	
		・各事業の取り組みを集約し、情報共有する方法を検討する。	・市ホームページ「文化芸術振興の取り組み」のコーナーに、年度毎の事業カード一覧を情報共有のため掲載している。	
		・条例やビジョンの告知媒体への記載の取り組みについて、ロゴマークの作成など、より周知しやすい方法を検討する。	・文化振興審議会へロゴマーク案を提案し、作成に向けて進め始めた。	
子どもや障がい者等の文化芸術に触れる機会 の充実	・子どもや障がい者等、文化芸術に触れることが難しい人がいる。	・学校や福祉施設などでのアウトリーチは、当事者にどのような内容のものを提供すべきかを関係者と十分に協議し、実施後は成果を他のアウトリーチに反映する。	・現場のカリキュラム編成やスケジュール、受け入れ態勢やニーズなど、事前に連絡調整し進められた。教育委員会の理解や協力も得られた。	・文化芸術活動への参加が困難な人たちへの参加の機会や発表の場を確保する。 ・家族で文化芸術と出会う機会を広げる。 ・伝統芸能や民俗行事への子どもの参加を促進する。 ・文化芸術を取り入れた子育て支援事業を推進する。
		・チラシなどが保護者らの目に届き、大人が興味を持てるように情報提供をする。	・親が興味を持てるよう、チラシにQRコードを付けたり、SNSによる配信を行ったり、新たな方法も取り入れた。	
		・地域の文化や歴史の継承のため、大人だけでなく子どもも参加できる取り組みをしていく。	・子どもや若者が参加したいと思えるように、市民ニーズを意識し、新しい試みを取り入れた。 ・親が文化に興味を持てるように、大人も楽しめる事業運営や、小さな子ども連れでも参加できるように心掛けた。	
		・経済格差等により文化に触れられない子どもへのアプローチに取り組む。	・庁内で、家庭環境や経済格差等による子どもをめぐる課題等を共有し、連携・協力を依頼した。	
地域や事業者との連携	・学校のクラブ活動の地域移行へのバックアップが必要。 ・地域の現状課題の把握が必要。	・学校のクラブ活動の地域移行を見据えて、学校と地域や商工会議所（事業者）、地元の文化芸術協会との理解や連携を図る。	・教育委員会において、学校のクラブ活動の顧問会議を開催し、地域移行についての現状課題の把握を行った。吹奏楽部では課題が多く、今すぐに地域移行ができる状況ではなく、課題を整理しながら引き続き進めていく状況である。	・文化芸術活動に参加できる人材を発掘する。 ・文化芸術イベントなどへの参加による居場所づくり。 ・文化芸術を中心として様々な立場の人が参画、活動する場の創設。 ・福祉、医療、多文化共生、産業などさまざまな分野連携による文化芸術活動の推進や地域振興。
		・文化に触れることができない人がいることは人権問題である、という考えを持ち取り組む。	・庁内各課事業において、社会的弱者に参加機会が確保されるよう、文化芸術事業と連携・協力を依頼した。	